

やまびこ

BULLETIN OF YAMAGATA UNIVERSITY LIBRARY

No.57 2006.10

[蔵王のお釜(火口湖)]

もくじ

本館所蔵の160年前の中国のカレンダー —『大清道光二十七年歳次丁未時憲書』 人文学部 教授 新宮 学	1
学術情報部がスタートしました	3
平成18年度次世代学術コンテンツ基盤構築事業について	4
地域貢献の展開—中央図書館における小中高生との交流—	5
ひろば(図書館からのおしらせ)	6
本学教員著作寄贈図書	7
附属図書館運営委員会名簿	7
附属図書館運営委員会審議事項	7
各館図書委員会審議事項	8
中央図書館後期ガイダンス案内	8
学術情報部(図書館)連絡先	8

本館所蔵の160年前の中国のカレンダー ——『大清道光二十七年歳次丁未時憲書』

人文学部 人間文化学科 教授 新宮 学

本学附属図書館には、100年以上も前の暦(こよみ)が一冊所蔵されている。書名は、『大清道光二十七年歳次丁未時憲書』(不分巻)である。時憲書とは、清朝の欽天監(国立天文台兼気象台)が作製した暦のことである。

表紙の部分には、「欽天監欽遵御製、数理精蘊印造時憲書、頒行天下」と印刷し、第4葉表には、「欽天□□憲書之□」(□は判読困難)という朱印が押しあり、欽天監で印造した時憲書であることがわかる(図版1、2参照)。中国清朝の道光27年は、わが国の和暦では弘化4年、西暦に直せば1847年である。館報『やまびこ』の本号を手にするころには、街では2007年版のカレンダーが生まれ始めてはいるはずであるから、ちょうど160年前のカレンダーというわけである。

その当時、海を隔てた中国ではアヘン戦争が勃発、イギリス艦隊の砲撃に敗れて香港割譲を迫られるなど、植民地化の危険が差し迫っていた。鎖国体制をとる日本にも、オランダやアメリカの船が来航するようになっていた。中国同様の危険をいち早く察知していた佐久間象山が、蘭学を学び洋式野戦砲を造り始めたのは1848年のことである。

さて、この時憲書はわずか24葉からなる線装本で、朱墨二色刷のいわゆる套印本(重ね刷り)である。朱刷部

分はかなり色褪せて、このままでは判読が困難である。都北京や各省の節気・時刻、年神方位の図、各月の大小と日の吉凶・禍福・禁忌、年齢早見表などが、墨刷で記されている。これらの記載がその当時いかなる意味を持っていたかを正確に読み取ることは、いまではかなり難しい。しかし、そこに盛り込まれたさまざまな情報は、当時の人たちの日々の生活を確実に律していた。

そもそも、近代以前の中国では、暦は皇帝から賜わるものであった。中央官僚はもちろん、地方の官僚や都に朝貢した外国の使節にも、暦が一冊ずつ配られた。その配られた数は膨大で、大量に用意する必要があったから、早くも唐代後半には木版刷で印刷されていた。ちなみに、明代の北京の欽天監では一時期50万本以上の暦書を印刷したという、驚くべき史料もあるから、大量出版物の代表であったのは間違いない。とはいえ、暦は年が明ければ棄てられる運命にあったので、後世に残されることは極めて少なかった。書物と印刷の国の中国とはいえ、経書(けいしょ)や史書のような科挙に必須の学問以外の書物は残らないことが多い。

この暦をここで紹介したのは、ちょっと珍しいという理由からだけではない。道光27年の時憲書は、わが国の国会図書館をはじめ東京大学、京都大学などの主要

な図書館にも所蔵されておらず、貴重書としての価値を有するからである。また管見の限りでは、中国や台湾の国家図書館の漢籍善本目録類を引いても、その所蔵が確認されず、まさに「天下の孤本」である可能性も高い。国内で時憲書のコレクションを最も数多く所蔵しているのは、東京にある国会図書館である。しかし道光25年から30年までほぼそろっているなかで、道光27年のみが欠けており、おそらく国会図書館で欠けている一冊が、何らかの経緯で本学附属図書館に収蔵されるようになったものと推定される。

さて、このような貴重書が本館に所蔵された経緯であるが、現在のところまだ詳しい調べがつかない。封面には、米沢出身の郷土史家伊佐早謙(いさはやけん)の蔵書印が押してあり、ある時期、彼が収蔵していたことが判明する。その裏に押された受入印から、昭和30年11月18日に附属図書館の教育学部分館で購入したことがわかる。図書館に残る古い帳簿で調べてみると、購入価格が当時の価格で30円、納入した業者名は廣瀬速水とある。この時期に、約700種の和漢籍とともに一括購入されているが、これらの書物が旧教育学部分館に収蔵された経緯についてはよくわからない。

この貴重な時憲書は受入作業が済んでからも、正確な書誌データが作成されることはなかった。全くの偶

然であるが、本書が附属図書館に受入られた昭和30年(1955)は、私の生まれた年である。私が生きてきた歳月と同じ期間、蔵書カードも作成されずに書庫の片隅に放置されていたことになる。目に留まったのも、なにかの縁と言えよう。本館には、こうした状況に置かれた和書と漢籍が、ざっと見て3000タイトルほどあり、そのうち漢籍は約500タイトルと推定される。

半世紀もの間ひっそりと書庫にしまわれていたこうした書物を深い眠りから覚まし、新たに登録するための基礎作業をしているのが、人文学部研究支援プロジェクトの一つに採択された「山形大学附属図書館所蔵未整理漢籍の調査研究」である。このプロジェクトは、昨年人文学部の中国学関係の教員5名と図書館職員1名で発足した。5年を目途に調査する計画を立て、昨年度には約100タイトルを調査整理して、経・史・子・集部の四部分類にもとづく書誌データを作成した。この調査の過程で、見つかった貴重書の一つが今回紹介した時憲書である。ほかにも、メンバーの調査で、いわゆる明版(中国の明朝時代1368-1644年に出版された木版印刷)の漢籍がすでに10種ほど見つまっている。未整理漢籍の調査がすべて終わる予定の数年後には、本館の漢籍蔵書の価値が一層高まることが期待される。

(あらみや まなぶ)

【図版1】大清道光二十七年時憲書封面と伊佐早謙の蔵書印



【図版2】大清道光二十七年歲次丁未時憲書第四葉表の書影

